

氏名	藤本龍児
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博第387号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科共生文明学専攻
学位論文題目	多元社会における公共宗教 ——1970年代以降のアメリカの諸思想と宗教——
論文調査委員	(主査) 教授 佐伯啓思 教授 大澤真幸 教授 カール・ベッカー 教授 森孝一

論文内容の要旨

本博士学位申請論文は、アメリカ社会を対象とし、多元社会における宗教の意味について論じるものである。特に、19世紀の初頭にトクヴィルがアメリカに見出した「市民宗教」の伝統が、多少、変形されながらも現代アメリカに継承されていると、候補者は考えており、そこに「公共宗教」の可能性を見出す。アメリカ社会は、移民国家であるがゆえに、常に多元化、多様化するという側面と、同時にまた、その多様性を統合するという側面を併せ持っている。本論文の意図は、アメリカ社会の多元性、多様性の中において、それを統合し、かつ「キリスト教の絶対化」を批判する機能を持つものとして「公共宗教」の役割と可能性を論じるところにある。

また、多くの近代社会論においては「世俗化論」が中心であり、近代化の進展と共に、宗教の意義と役割は衰退すると考えられている。本論文は、この想定に対して異議を唱えるものであり、アメリカ社会においては、近年、宗教的なものへの関心が高まっていることを例示しつつ、そのことの意味を解明しようと試みる。

各章ごとの内容要旨は次の通りである。

序章においては、主題設定の背景を、1970年代以降のアメリカにおける宗教復興現象と多元主義の進展から説明し、先行研究の整理を通して、「公共宗教」を個人的信仰とは別の「集団的信念」の一形態と規定する。

第一章では、現代の「見えない宗教」を考察するための方法が提示される。現代の宗教社会学が、おもに「教会」や具体的な信仰の様式といった「目に見える宗教」を扱うのに対し、ここでは「公共哲学」の方法論を参考にすることで、「人々に共有された世界観」と、そこに示唆される「世俗内／世俗外」の観念を考察の対象とすることが論じられる。

第二章では、1970年ごろから登場する「ニューエイジ運動」と個人主義の関係が取り上げられる。ウェーバーの「世俗内禁欲」やデュモンの「世俗外個人」の概念と個人主義の成立の関係が検討され、「個人の自律」がなされるためには、「世俗内他者」（いわゆる他者）のほかに「世俗外他者」（神や聖なるものなど、この社会の「外」にいる他者）の存在が必要であると説かれる。

第三章では、やはり1970年代から興隆した「原理主義」と「リヴァイヴァル運動」の関係が取り上げられる。ここでは、アメリカ史における政教分離の意味を分析するために、「リヴァイヴァル運動」が繰り返し現出することが論じられ、また、アメリカの原理主義の中核要素である「千年王国論」に着目することで、現代アメリカの原理主義が政治思想に変化する、もしくは類似性を帯び、結果として進歩主義と親和的な性格をもつようになることが指摘される。

第四章では、トクヴィルの「共和的宗教」と現代の「共同体主義（コミュニタリアニズム）」との関係が取り上げられる。「共同体主義」は、トクヴィルのアメリカ論、特にそのコミュニティ論から強い影響を受けており、また「個人の自律」のためには「重要な他者」との持続的なコミュニケーションが不可欠であると主張していることが確認される。にもかかわらず、共同体主義が、「共同体の自律」を求められる場面になると「普遍的他者」というリベラリズム的な要素を導入し、あ

るいは「世界市民宗教」を唱えるという一種の自己否定（固有の共同体の否定）に陥ってしまっていること、そして、その原因がトクヴィルの宗教論を十分に取り入れていない点にあることが指摘される。

第五章では、1980年代から興隆した宗教右派と「ネオコン」の関係が取り扱われている。ここでは、両者の共通点と相違点が明確にされるが、候補者が注目するのは、両者による「政治的なもの」と「宗教的なもの」の接近である。候補者は、「ネオコン」の第二世代と宗教右派の共闘に見られるような、80年代以降の政治と宗教の接近を批判したうえで、「ネオコン」の第一世代が重視していた「市民宗教」の意義を改めて強調する。

第六章では、「市民宗教」と「多文化主義」の関係について論じられている。ここでは、リベラルな西欧文化を核にもつ「文化多元主義」と、エスニックな民族、文化の多様性を主張する「多文化主義」が区別され、その上で「文化多元主義」の基底に、アメリカ社会の規範を生み出している緩やかな「聖書的伝統」を位置づけて、そこに候補者のいう「公共宗教」の可能性を見出そうとする。

終章において、候補者は、リンカーンの演説に立ち戻って、改めてアメリカ社会のなかに、強固な超越的神の観念とは異なった、「聖なるもの」の観念が受け継がれていることを指摘し、それが「キリスト教の絶対化」を批判する機能を果たしうることを強調する。

このように、本論文は、70年代以降におけるアメリカにおいて、何らかの形で「宗教的なもの」が復興、登場するという事実の意味を分析し、その根底に「市民宗教」が存在するというアメリカ社会の歴史的構造を見出す。その上で、現代アメリカの「多元社会」における「公共宗教」の重要性を論じるものである。

論文審査の結果の要旨

本博士学位候補論文は、現代アメリカという「多元社会」における宗教の意味を論じるものであり、広い意味では宗教社会学的研究といえようが、また、従来の宗教社会学とはいくぶん異なった問題意識と方法を持ち、独自の主張を含んだものである。本論文の特徴を次に述べておきたい。

第一に、本論文のスケールの大きな領域横断的性格が指摘されよう。本論文は、アメリカ社会を素材にして、社会や社会思想と宗教の関係を扱っており、従来の研究としては、マックス・ウェーバーの宗教社会学、バーガー、ルックマンらの現象学的社会学、さらにベラーらの社会学の延長上にあると考えられる。にもかかわらず、本論文の射程は、社会学や宗教社会学にとどまらず、共同体主義（コミュニタリアニズム）とリベラリズムとの政治哲学の議論、「ネオコン」の思想論、宗教的原理主義の意味理解といった広い範囲に及び、大きくいえば、社会学（宗教社会学）と社会哲学を架橋するものになっている。このような領域横断的でスケールの大きな宗教と社会についての研究はきわめて珍しい。

第二に、本論文はまた、宗教から見たアメリカ社会論と、社会哲学という理論的・思想的関心のふたつの視点を持っており、この両者を架橋するものとなっている。アメリカ社会論としていえば、本論文は、70年代以降のアメリカ社会のナルシシズム的傾向やニューエイジ運動、また原理主義運動やリヴァイヴアル運動、80年代の宗教右派や「ネオコン」の台頭、さらには、「多文化社会」と「文化多元主義」、共同体主義など、これまで別個に研究されてきたテーマをきわめて要領よく整理して、それらを総合的に、しかも「公共宗教」の可能性という独自の視点から論じている。

第三に、本論文は、近代社会における宗教の位置に関して独自の見解を示している。宗教と社会の関係についての従来の一般的な図式は、近代化論、世俗化論と呼ばれるもので、近代化の進行につれ「宗教的なもの」は衰弱するという仮説にもとづいていた。そこまでいわずとも、政教分離によって、宗教は、世俗的領域から排除されるとみなされてきた。これに対して、候補者は、近代社会においても「宗教的なもの」はいくぶん変形されながらも影響力をもつと考え、このことを現代アメリカ社会において説得的に論じている。また、その中で、アメリカにおける政教分離の意味を再検討し、現代における「政治」と「宗教」の関係をも分析している。この論点はいくぶん論争的な意義を持っているが、従来の政教分離論によるアメリカ社会理解を超えて重要な問題を提示している。

第四に、本論文は、アメリカ社会を素材にして、宗教についての二つの態様を区別し、「公共宗教」という独特の概念を提示している。アメリカ社会の底流にユダヤ・キリスト教的な超越的一神教が存在することは、これまでもしばしば指摘されてきたことであるが、候補者は、「宗教的なもの」の次元に、一神教の神のような明確な超越性とは異なった次元を見出し、

それを、人々の社会生活圏や共同体に密着した「心の習慣」、あるいは共通の「世界観」を構成する一要素としての「聖なるもの」と解している。その上で、この「聖なるもの」の次元において候補者は「公共宗教」の観念を提示する。これは、研究史的にいえば、バーガー、ルックマンらの現象学的な宗教社会論とベラーの市民宗教論を踏まえて両者を総合しようとした分析概念である。

確かに、「公共宗教」という候補者の中心的な概念における曖昧さや十分に整理しきれないもどかしさは問題点として指摘できる。この概念の有効性は、今後の候補者の研究の進展にかかっているという側面は否定し得ない。にもかかわらず、ユダヤ・キリスト教という明確な形をとった超越的宗教とは少し異質な次元に、より一般的でより抽象的なものとして「公共宗教」という観念を提示したことはたいへん刺激的であり、しかも、大きな可能性を持っている。ひとつは、この概念により、多様性と多元性をもったアメリカ社会の「統合」という側面に新たな光りを当てることが可能となるからであり、もうひとつは、「聖なるもの」を軸にした「公共宗教」の観念によって、ユダヤ・キリスト教的な文脈を強く有したアメリカ社会以外の他の社会においても、それぞれの「公共宗教」を論じる可能性が開かれるからである。

本論文はいくぶん荒削りで、いっそう細部にわたる論点の進化と精緻化が望まれるものの、ここで提示されたアメリカ社会における「公共宗教」という分析概念は、宗教社会学、社会哲学、そして現代アメリカ社会論の各分野において、すぐれて重要で新たな視点を提示するものである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成19年12月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認める。